【調査報告】

1日見学実習で学生は何を学んだのか

－反省レポートの分析を通して－

大　岩　みちの

吉　田　龍　宏

要　旨　本稿は実習の事前指導の充実を図るために、本学幼児教育学科第一部一年生が、平成15年9月に行なった1日見学実習について、学生が実習後記入した反省レポートの分析を基に検討したものである。分析の結果、一日という短い期間、また、入学後半年足らずの実習であるにもかかわらず、学生は保育者としてのマナー（あいさつ、身なり・服装、態度、言葉遣い）を自覚し、実際に子どもの姿を見たことにより、保育者としての子どもへのかかわり方を考えるきっかけを得ていることが明らかとなった。

1　はじめに

保育者養成校の実習担当の教員にとって、実習に向けた学生の資質向上のために授業や実習指導計画に何をどのように組み込んでいくかということは常に頭から離れない課題である。

本学では、平成13年度以前には、実習の事前事後の指導の不十分さを感じていたという担当者の反省をふまえ、平成14年度には、幼児教育学科第一部1年生前期の実習の授業を増設した。しかしながら、1年次の年度末、2月に行われる初めての幼稚園見学実習までには、目標が遠すぎるのか、また、指導計画に工夫がないためか、学生の意欲が停滞しているのではないかと不安を感じることの多い授業が続いた。そこで、2月に見学実習を行なうまでの意欲の向上に思案を重ねた末、間近に目標を設定することの必要性を感じ、急遽授業計画を変更することとした。

本学には付属幼稚園が三園あることから、当時の1年生256名が、学生はまだ夏季休業中である9月の第2週に「1日見学実習」を設定した。月、火、木、金の降園時刻が同一である4日のうちの一日を見学実習することとし、三園全体の21クラスに学生を分配し、1クラスに4～5人の実習生を配属した。

この実習の時間は、9時から16時までの7時間、ねらいは「園生活の一日の流れを知る」、「保育者の仕事を知る」とした。

「1日見学実習」は、10～12月の土曜日に同じクラスで20～30分程度の遊びを計画し実習をした「土曜参加実習」や、2月に1週間行った「付属幼稚園見学実習」に向けた事前指導の一環として行ったものである。

この「1日見学実習」後に学生が書いた反省レポートを読む中で、学生が保育者としてのマナーや子どもへのかかわり方について多くの点に気づいたと感じた。そこで、反省レポートの内容を分析することを通して、1日という短い期間の中で学生がどのようなことを感じたり、学んだりしているのかを検討することが本調査報告の目的である。また、この検討をふまえて、事前指導のあり方についても考えたい。

現時点で、筆者が事前指導をどのようなものと捉えているのかについて、予め触れておきたい。基本的には、厚生労働省からの通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について（平成15年12月9日雇児発第1209001号）」に基づくものである。「実習を円滑に進めていくための知識・技術を習得し、学習内容・課題を明確化するとともに、実習体験を深化させる」というねらいに対して、以下の内容を学ぶものと考える。

(1)　実習の意義・目的・内容の理解

(2)　実習の方法の理解

①　見学・観察・参加実習の進め方

② 教材研究の方法の理解（研究の仕方）
③ 指導計画の立案の方法の理解（指導案の立て方）
④ 実習期間全般における実習の進め方（実習の流れ）

(3) 実習の心構えの理解
① 実習におけるマナー
② 守秘義務とは何か

(4) 実習課題の明確化
①「実習に向けての私の課題」の作成

(5) 実習記録の意義・方法の理解

(6) 実習施設の理解

この６点の他、さらに、事前訪問、指導訪問（巡回指導）についての意義・目的・内容の理解も含めて事前指導と捉えた。

2 研究の方法

「１日見学実習」終了後、学生が記入した反省レポートの記述を検討した。反省レポートは、自分自身の反省、友達・仲間について感じたこと、課題の達成度、学んだこと、感動したこと、疑問に感じたこと、感想を自由記述で記入したものである。なお、この反省レポートは「１日見学実習」の事後指導として行ったものであり、本研究はレポートを回収後、分析した。有効回答数は165であった。

学生の記述の分析にあたっては、レポートの項目に基づき、次のような視点で整理をした。

①保育者や実習生に必要なマナーを「あいさつ」、「身なり・服装」、「態度」、「言葉遣い」と捉え、「１日見学実習」時の自分自身や、他の実習生が実習生としてのマナーを守って実習をすることが「できた」か「できなかった」かに分類した。

②実習中に学生が学んだと思っていることについては、「１日見学実習」のねらいに基づき、１日の生活の流れの中で見た「子どもの姿」と、「保育者の子どもへのかかわり」の２つの学びが予測されるので、学生の記述を整理するためのカテゴリーとしてこの２項目を設定した。

③実習中に学生が疑問に感じたことについては、「保育の流れ」、「保育者の仕事」の２つを「１日見学実習」のねらいに基づくカテゴリーとして設定した。また、「(実習生としての) 子どもへのかかわり」、「子どもの姿（発達)」、「食事」の３つを実習中の幼児理解や援助にかかわって、学生が疑問に感じやすいものとしてカテゴリーに加えた。そして、「その他」と合わせて６つのカテゴリーを設定し、記述を整理した。

④実習中に学生が感動したことについては、実習生が見たり、自分が体験したりすることを基に「子どもの姿」、「子どもと保育者のかかわり」、「子どもと実習生のかかわり」、「保育者の実践」の５つのカテゴリーを設定した。また、こうした体験から、「保育者としての喜び」を感じると考え、カテゴリーに付加した。合わせて６つのカテゴリーで、感動したことについての記述を整理した。

以上のように学生の記述を整理し、学生がどのようなことに気づき、学んだのかを検討した。

3 結果と考察

① 実習時のマナーへの気付き

「あいさつ」、「身なり・服装」、「態度」、「言葉遣い」について、「できた／できなかった」を分類した結果は〈グラフ１，２〉が示す通りである。

〈グラフ１〉は、記入した学生自身について「できた／できなかった」と思っていることを分類した結果である。また、〈グラフ２〉は、記入した学生が他の学生について気づいたこととして記述したものを分類した結果である。

〈グラフ１〉および〈グラフ２〉に共通した傾向として、「身なり・服装」については、「できた／できなかった」と答えた学生の合計は、他の３項目と比べて多数であった。また、〈グラフ１〉では、「できた／できなかった」のいずれにおいても、「身なり・服装」に関する記述が多く見られた。この結果から、学生は保育者としてのマナーの中で、特に「身なり・服装」について強く意識したことがわかる。こうした結果が見られる背景には、「身なり・服装」は学生が外見から判断しやすいことと、実習の前に服装については、動きやすさ、アクセサリーの禁止、髪形についての事前指導を行ったため、学生の意識に強く残っていたことの２点が考えられる。また、記述の内容について見ると、「身なり・服装」については非常に具体的に書かれていた。例えば、「髪を束ねる」、「背中の出ない服装」、「動きやすく遊びに支障の無いものを着る」、「アクセサリーを身につけたり、爪を伸ばしたりすることは子どもを傷つけるためよくない」など、保育者としてどのような

「身なり・服装」が求められているのかという具体的な視点で書かれている。こうした具体的な記述からも、学生が「身なり・服装」について強く意識し、理解をしていることがわかる。

また、〈グラフ１〉について「できなかった」と記述した学生の数は30～47の間であり、大きな傾向の違いが見られなかった。そこで記述の内容から検討をしてみる。

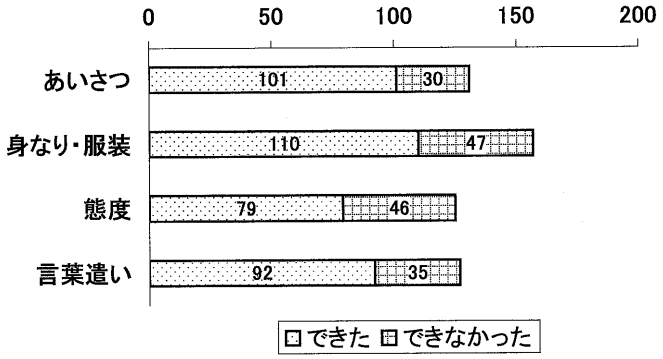
多かった記述は、「身なり・服装」と「態度」であり、ほぼ同数であった。「態度」については、「消極的」、「指導保育者に指示されないと動けない」などの記述が多かった。しかし、〈グラフ２〉を見ると、他の実習生の態度を見て「できた（できていた）」と答えた学生が多く、積極的に動いていたことを具体的に書いていた。このことから、学生が他の実習生の態度から、保育者としてのよりよい態度について気づいていることがわかる。

また、「言葉遣い」や「あいさつ」は、「身なり・服装」や「態度」と比べるとやや少なかった。「言葉遣い」に関する記述は、「指導担任へ正しい敬語を使うことができなかった」、「実習生同士の会話が日常の友達同士の話し方になっていた」という内容が多く見られた。また、「あいさつ」については「保護者に挨拶することができなかった」という記述が多かった。ただし、今回の実習の流れでは保護者と接する機会があまり無いことと、〈グラフ２〉の他者評価では、ほとんどの学生が（相手が誰であっても）「あいさつ」は「できていた」と記述している点を併せて考えると、今回の「１日見学実習」では、「あいさつ」はよくできたのではないかと考えられる。

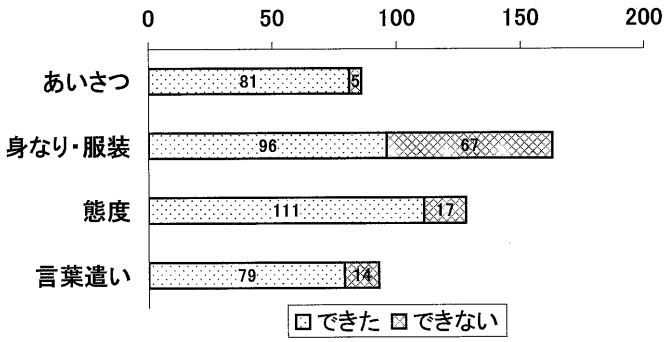
以上の結果から、「１日見学実習」では、多くの学生が保育者（実習生）としてふさわしい「身なり・服装」、「態度」、「言葉遣い」、「あいさつ」について実習の中で自分から気づき、実践することができたことがうかがえる。即ち「１日見学実習」は、学生の意識の中に「職業人としての保育者にふさわしいマナー」を意識づける機会になったと考えられる。

また〈グラフ２〉の結果より、他の実習生を見て、保育に適した服装や、場面に応じた態度・服装・頭髪・言葉遣いについて気づいた学生も多くいたことがわかる。このことは、一クラス、あるいは一園に多くの学生が共に実習することにより、互いに向上し、気づくきっかけになったことを示唆しているのではないだろうか。

〈グラフ１〉自分自身について気づいたこと



〈グラフ２〉他の実習生について気づいたこと

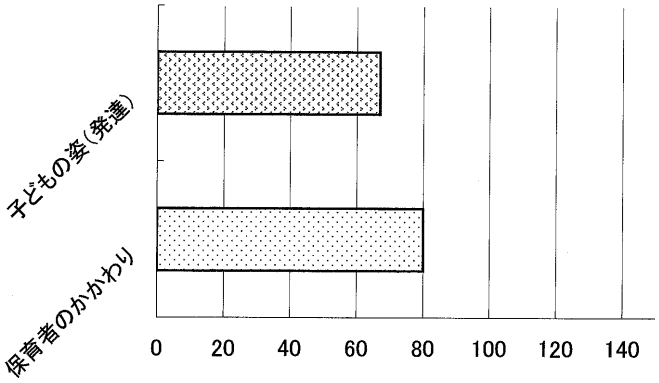


② 学生の学び、疑問に思ったこと

学生が学んだことについては、「子どもの姿（発達）」と「保育者のかかわり」の２つのカテゴリーに分類できた。この２つを比べると「保育者のかかわり」についての記述がやや多く見られた。（〈グラフ３〉参照）「子どもの姿（発達）」のカテゴリーで多く見られた記述は、学生が考える幼児期の子どもの姿とは違っていたことや、友達と協力して遊ぶ姿に気づいたことから、学生が考えている子どもの姿よりも成長した姿が見られたことであった。すなわち、これまで学生の中に描いていた「幼児期の子どもの姿」とのズレに気づき、子どもの実際の姿から新しい子ども像を形成するきっかけとなったことがわかる。

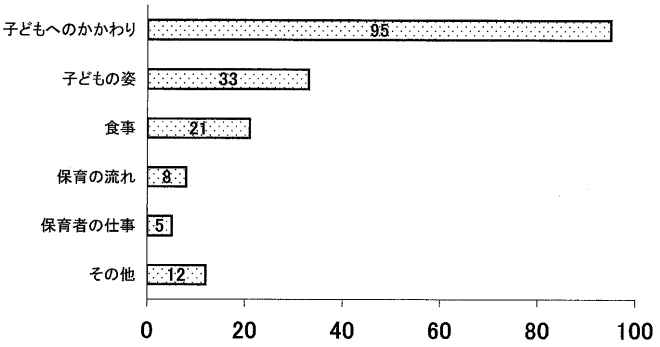
「保育者のかかわり」について学んだと答える学生は約半数を占めた。多く見られた記述は、「大勢の子どもたち一人一人を理解していること」、「子どもたちを理解し、適切な援助をしていること」、「けんかの場面で落ち着いて子どもに対応していること」、「子どもと一緒に活動する際、子どもを惹きつける力を持っていること」などで、特に保育者の子どもへのかかわり方についてあげる学生が多く見られた。

〈グラフ３〉学んだこと

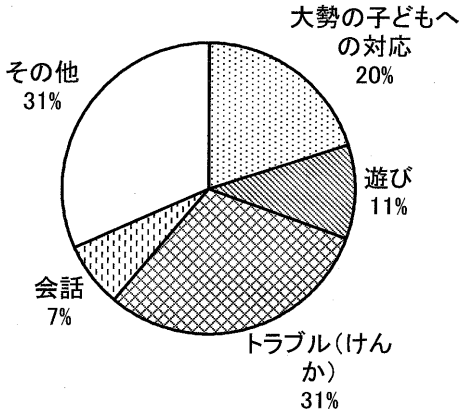


学生が疑問に感じたことについては、〈グラフ４〉に見られるように、「子どもへのかかわり」が、他の５つのカテゴリーに比べて多くの記述が見られた。そこで、「子どもへのかかわり」の具体的な内容を検討するために、類型化して割合を示したのが〈グラフ５〉である。「けんかやトラブルのときの対応」が最も多く、次いで「大勢の子どもへの対応の仕方」、「遊びへのかかわり方」と続いた。

〈グラフ４〉疑問に感じたこと

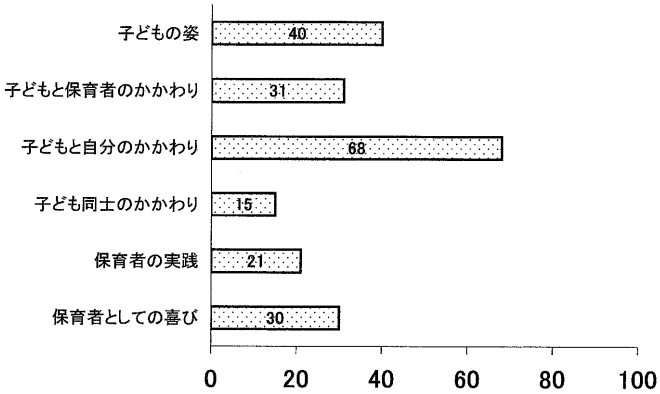


〈グラフ５〉子どもへのかかわりについての疑問内訳



感動したことについては、〈グラフ６〉から、「子どもと実習生である自分自身とのかかわり」に関する記述が最も多かった。これは、「保育者としての喜び」のカテゴリーにある「先生と呼ばれたこと」という記述を含め、学生が子どもから声を掛けられたり、一緒に遊んだりする中で喜びを感じると同時に、保育者として子どもから認められたと学生が実感したためと考えられる。このような体験は、学生の保育職への志望や保育についての学びに対する動機形成につながると考えられる。また、「子どもの姿」についての記述は、〈グラフ３〉の学んだことについての記述と同様、学生が考えていた幼児期の子ども達の人間関係、遊びを展開する力との違いに気づき、驚きを感じている。さらに、「子どもと保育者のかかわり」についても、保育者のかかわり方を見て、「尊敬した」、「子ども達の気持ちに寄り添ったかかわり方に感動した」など、自分たちのかかわり方に比べ、保育者が適切なかかわり方をしていると感じたことを理由として記述していた。

〈グラフ６〉感動したこと



このような傾向から、学生がこの実習でどのようなことを経験し、何を得ることができたのかを検討したい。

疑問に感じたことの結果からは、学生が「子どものけんかや遊びにどうかかわってよいのか」、また「大勢の子どもから一度に呼ばれたり、声を掛けられたりしてどのように対応してよいのか」ということに戸惑ったことがうかがわれる。その中で、子どもたちがけんかやトラブルを解決したり、遊びを進めていったりする姿を見て、驚き、自らの持っていた子ども像とのズレに気づいたものと考えられる。そして、この気づきから「大勢の子どもをどのように理解し、援助していけばよ

いのか」という課題が出てきた。学生は「1日見学実習」において、保育者の行動に目を向け、その結果、学んだことや感動したこととして、保育者の実践、保育者と子どものかかわりをあげている。そしてこのことは、今回の反省レポートだけではなく、その後学生から提出された土曜参加実習や教育実習にむけての新たな課題からも確認することができた。

また、今回の実習で学生は、実際に子どもたちの生活や育ちをじっくりと見たり、保育者の姿について反省レポートで着目したりしていることから考えると、「自分ならどのようにかかわればよいのか」という、保育者（専門性をもって子どもにかかわる者）としてのまなざしが芽生え始めていると思われる。学生の見方は、まだ印象や思い込みの域を出ないものも多いが、こうした実習体験は、今後の実習での幼児理解や子どもへのかかわりにつながっていくものと考える。

さらに、この実習で学生が子どもとのかかわりに感動し、保育者としての喜びを感じていることもとても重要である。本学の学生にとって、2年間の短期間で保育者としての学習を進めていくにあたり、保育者の仕事につくという明確な目的意識が養成教育における学びの動機形成にとって重要となる。この実習での子どもと実習生のかかわりは、その原動力を形成するための機会になったものと考えられる。

4　まとめ

反省レポートの分析結果に基づいて学生の気づきや学びを検討した。その結果、一日という短期間の幼稚園での実習においても、学生は保育者としてのマナー（あいさつ、身なり・服装、態度、言葉遣い）を自覚し、実際に子どもの姿を見て、保育者としての子どもへのかかわり方を考えるきっかけを得ていた。そして、学生は、保育者や周りの実習生の姿から学ぶという観察学習や子どもへのかかわりがわからなかったときに保育者からアドバイスを受けて学ぶという機会教授（非計画的に、場面に応じて教えられる）による学びをしていることが、反省レポートの記述からわかった。こうした学習方法は、実習においてはあたりまえの方法ではあるが、入学して半年もたたない学生にも保育現場においてこうした学び方ができるということが確認できた。

また、今回の検討を通して、「1日見学実習」の課題が見えてきた。確かに学生にとっては、実際に子どもの遊びや保育者の仕事に触れるという経験はとても大切である。特に、子どもとの触れ合う経験が少なく、生活経験も少ない、あるいは乏しい学生にとって、これから保育についての学びを進めるためにも、こうした経験が必要であろう。

しかし、こうした経験を学生の学びに活かすには、学生が実習において、何をどのように学び、次にどう活かしていけばよいのか、学べなかった点を次回はどうしたいと考えているかなどを学生自身の意識の中に明確にしておかなければならない。この指導はそのまま、教育実習や保育実習にむけての事前指導につながる。しかしながら、今回の実習においては事後の反省レポートで疑問に感じたことや課題の取り組みなど、個別の指導の時間を十分に取ることができなかった。すなわち、学生が前述のように多くの気づきや学びを得てきたにもかかわらず、経験したことを整理して明確にするために、経験したことを話し合ったり、記録をもう一度読み直しながら自分の学んだことを整理したりする機会がなかった。そして、翌年2月に行った5日間の付属幼稚園見学実習でも、やはり事後指導で、時間（時期）的な問題もあり、充分に学んだことを次の学習や実習に活かすための指導を行うことができなかった。その点では、実習の事前指導として学生が保育の現場で体験したことを整理することができていないという課題が明らかになった。

本調査を通して、学生が9月の時点でも子どもや保育者、同じ実習生の姿から学ぶことが確認できたことを受け、また短期間で十分に子どもや保育者を見ることができなかったという意見も踏まえ、5日間の見学実習を9月に実施するように実習指導計画の変更を行った。この変更の大きな理由は、実習で体験したことを振り返るための時間を十分に確保するためである。9月に実習を行うことによって、今回の検討で明らかになったような学生の学びを、学生自身が意識することができるように、後期の大学の授業で取り組んでいくことができるからである。ただし、そのためには、学生が何をどのように学んできたのかを検討する必要がある。

そのためには、保育者養成校の教員自身も、学生の学びに対する実態把握、すなわち「学生理解」が一層求められるものと思われる。その一つの有効な資料として、学生の実習記録があげられる。本調査では、実習後の反省レポートについて検討したが、こうした反省レポートや実習中の記録で焦点を当て

る部分の選択の仕方と取り上げたエピソードの捉え方に加えて、いかに子どもや保育者、あるいは園全体や仕事内容を見ようとしたかを検討することを通して、学生の学びが明らかになってくる。

今後、実習の事後に、実習における学生の記録や反省の内容を理解し、さらには事後指導での学生の意見や実習園からの意見の分析をすることで、実習のカリキュラムや指導方法の検討をさらにすすめて、実習の事前指導の充実を図っていきたい。

【参考文献】

(1) 小川博久
「遊びの伝承と実態」
新・児童心理学講座　第11巻　第Ⅳ章
金子書房　1991

(2) 小川博久
「教育実践学のフィールド・ワークとしての教育実習」
東京学芸大学教育学部付属教育実習センター
研究紀要出版委員会　1996

(3) 小川博久
「遊びや総合的学習を援助（支援）する
教師の資質養成の可能性を探る」
—現行の教師養成カリキュラムの枠組みを超えて—
教育方法研究会　2001

(4) 厚生労働省　雇用均等・児童家庭局長
「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について（平成15年12月9日雇児発第1209001号）」

(5) 森上史朗＋大豆生田啓友
「幼稚園実習 保育所・施設実習」
ミネルヴァ書房　2004

(6) 相馬和子・中田カヨ子
「実習日誌の書き方」
萌文書房　2004